

第1分科会

子どものやさしさや思いやりの 育ちを考える

助言者	丸田 愛子 (鹿児島国際大学福祉社会学部准教授)
司会者	門脇 弘子 (大根占幼稚園)
問題提起者	花田 史子 (日の出幼稚園)
記録者	日高 舞 (第一鹿屋幼稚園)
記録者	今村 希望 (第一鹿屋幼稚園)
ホスト	今村 竜 (第一鹿屋幼稚園)
ホスト	三浦 昌平 (大崎幼稚園)
運営委員	三浦 昌平 (大崎幼稚園)

【研究課題】

愛されて育つ子ども

【研究・研修の視点】

今日、少子化、核家族化、地域コミュニティの衰退、情報機器の普及、新型コロナウイルスの影響など、子どもを取り巻く社会環境の急激な変化は、物質的な豊かさと相まって、価値観の多様化や人間関係の希薄化をもたらしている。そんな中、幼稚園に入園するまでの家庭生活の中で、同年代の子どもたちと遊ぶ機会が少なく、大人とだけ関わっている子どもも少なくない。

子どもにとって、幼稚園入園は、大きな環境の変化である。家族と暮らす家庭から離れて、初めて同年代の子どもとの集団生活を送ることになる。幼稚園生活において色々な人や物と出会い、心が揺さぶられる様々な体験をする。それは新しい発見であったり感動であったり、時には、トラブルによる悲しみや悔しさであったり…友だちとの関わりの中で多様な経験をし、相互に良さを認め合いながら、仲間意識が育ち関係性が深まっていく。自分の思いが相手に伝わり、認められるという経験を通して、喜びや自信につながり、自己肯定感の高まりにつながる。自己肯定感が高まってくると、友だちの思いや考えも温かく受け入れようとする思いやりの心が育つと考える。

【研究・研修の手がかり】

- ・ 異なる言語や生活習慣の外国人幼児について、保育者や友だちとの関わりの中での自己肯定感（やさしさと思いやり）の育ちを考える。
- ・ 子どもたちの多くが初めての集団生活となる。進級児と新入園児、途中入園児が在籍する年少児クラスの事例をまとめ、自分や相手の気持ちを考えられるようにするための保育者の関わりについて、また子ども同士の関わりについて、研究に取り組む。

【研究計画】

◎令和4年度

外国人幼児や異年齢児との関わりを通して育まれる、やさしさや思いやりの育ちについて事例を通して検討する。

◎令和5年度

「愛されて育つ子ども」について研究をさらに深め、子どもを取り巻く環境を考慮し、保育実践、園内研修を継続する。

【発表の概要】

1 研究・研修テーマのとらえ方

友だちとの関わりの中で多様な経験をし、相互に良さを認め合いながら、仲間意識が育ち関係性が深まっていく過程を研究する。

2 研究の内容

- (1) 外国人幼児の入園から現在における記録と、インクルーシブ教育についての検討
- (2) 異年齢児の子どもたちが共に過ごす環境の中で見られる、子ども同士の関わりについて検討

3 研究の方法

- (1) 外国人幼児について、語彙力や言葉の理解が進むにつれて、友だちとの関わりの中でやさしさや思いやりが育っていくのではないかと考え、入園から現在に至るまでの成長の過程を示す。
- (2) 年少児について、楽しく遊んだり活動する中で、やさしさや思いやりが育つ基盤づくりを考える。

4 実践例

- (1) 言葉によるやりとりが難しいことにより、他児とのコミュニケーションが取れず、トラブルを起こしてしまっていた外国人幼児J君について、日常の保育の中で、保育者や他児との関わりを通して成長する過程。
- (2) 自分や相手の「気持ち」を知るきっかけ作りとして絵本教材を活用した事例。
- (3) 絵本に触れる保育活動が発展し、互いに共感し、思いやりの気持ちを受け止める事例。

5 まとめ

入園当初の年少児の生活は、家庭から離れて、同年代の幼児と日々を一緒に過ごす集団生活である。

また、3歳の誕生日を迎え2歳児クラスから進級してくる子どもたちもいる。

年度当初は、個を支援しながら、スムーズにクラスに溶け込めるように配慮している。先に在籍している子どもたちは自分より幼い子という認識があり、生活習慣を手伝う微笑ましい姿も見られる。しかし、自由遊びの中では、年齢差に関係なく遊具の取り合いでトラブルも発生する。そんな異年齢児の関わりに絵本教材を取り入れて事例として取り組んだ。年少児クラスでは、言葉の表現もまだ未熟で不安や緊張感からトラブルが起こるのは当然と考える。まず環境の変化による精神的な不安を取り除くため、保育者はありのままを受け止めた。J君は、その他に友だちに思いや考えを伝える方法が難しい状態であった。保育者はよき見本となるようにJ君の良さを他児にアピールしたり、困っていたら助けてほしい等、保育者自らJ君の気持ちを理解してあげたいという姿勢を示した。また、他児との関係が深まるように子ども同士の関わりを見守りながら、特別なことはせず個性として捉えるようにした。違いは感じててもその違いを尊重し認め合い、互いに支え合う心が育つように子ども同士の関係構築に努めた。J君も時間と共に言葉の理解が進み、意思の疎通がしやすくなった。子どもは言語習得能力が高いと言われているので、焦らず無理せず徐々に日本の生活に慣れていけるようにサポートした。

6 今後の課題

- (1) 見る視点や見通しを持った援助の改善を行いながら、環境構成を考える。
- (2) 個人的な主観や思い込み、先入観などにとらわれず、子どもたちの内面を観察する力を養う。
- (3) 保育者同士共通理解を深めながら、見る視点や洞察力を高め合う。

以上を実践しながら、保育者同士が相手を思いやり、心に寄り添い、尊重しあえる関係を保ち、子どもたちのモデルとしての保育者でありたい。

【討議の柱】

- ・ インクルーシブ教育を進めていくにあたっての工夫や取り組みについて考える。
- ・ 異年齢児のつながりを充実させる為の遊びや環境構成について考える。

【討議内容】

- ・ 討議の柱と子供達の優しさをはぐくむためにしている事、支援児との関りや配慮発表園への感想について各グループ話し合いを行った。
- (ルーム2) 発表者しゃらこども園
- ・ インクルーシブ教育について…ジェスチャーや携帯電話の翻訳機能を用いて信頼関係を築く。
(支援児の対応中他児への関りをどうしたらよいか課題である。)
 - ・ 異年齢の関り…年に数回コーナー遊び、朝や土曜日以上児で関わる時間を設ける。
- (ルーム3) 発表者なでしこ幼稚園
- ・ 異年齢の関わり…年長・中が年下のクラスに教える場を作る。
(ゲーム遊びや片付け方、身支度等)
- (ルーム5) 信愛こどもの園
- ・ 多国籍の子どもの保護者に対して寄り添っていることに感動した。
 - ・ チクチク・ポカポカ言葉を今後取り入れていきたい。
- (ルーム7) 啓明幼稚園
- ・ 心温まる会…子供の良いところを発表し合う。
 - ・ 療育に繋がっていない幼児に手が掛かる…保護者への伝え方、療育の進め方が難しい。
- (ルーム8) いずみ幼稚園
- ・ 他国籍の子が在園する園が2園あった。
細かいことを100%伝えられないので保護者との関わりが難しい。
 - ・ 文化の違いがあったため保育者三人体制で対応した。
- (ルーム9) みどり幼稚園
- ・ 多国籍の幼児…保育者が仲介して気持ちを伝え合う、言葉を代弁する事を繰り返す事でクラスに馴染んできた。
 - ・ マスク…表情が見えないため絵カードや一日の流れボードを用いて示す。
 - ・ 元々異年齢保育を行っているが進級時の様子に合わせて別々に活動をするように設定した。

【質疑応答】

- ・ J君はどの程度話せたのか、当初のサポート方法は…全く話せなかったため専任保育者を付けた。
対応法…中国語が話せないため初めはジェスチャーで関わった。絵本などを用いて言葉を習得し年中の二学期ではほぼ言葉の意思疎通が出来るようになった。
又、母親は日本語を話せたが、父親が話せなかった為父親に対しては携帯電話の翻訳機能を用いて子供の様子を伝えた。
- ・ コロナ禍での異年齢の関り…年少クラスに満三歳児も在籍している。又、天気の良い日は約30分程度自由遊びを行っている。異年齢で預かり保育を行っている。

【助言者まとめ】

第一分科会「愛されて育つこども」

「子どものやさしさや思いやりの育ちを考える」

・社会性の育ち

- 1 大人との関わり（愛着の築き）
- 2 自我の育ち
- 3 他児との関わり
- 4 感情の育ち
- 5 言葉の育ち
- 6 自立に向けて

1～6を幼児教育でこれらの育ちを目指す。

・他者への「やさしさ」や「思いやり」を育むにあたっては、大人の丁寧な働きかけが大切。

→やさしさは目に見えないものなので言葉ではなく行動でも示す。

やさしさや思いやりを育てるには

「向社会行動」の芽生え（1歳半～三歳ごろ）対人の為に労力をかけてする行動、共感能力がカギ

・「情動的共感」…相手が嬉しくなると自分も嬉しいと感じる。

・「認知的共感」相手の感情頭で理解する。

<保育のポイント>

・「言葉かけ」…向社会行動を促すために状況の説明と気持ちを添えて言葉を掛ける。

・「動きを真似る」…集団活動においても動きを真似ることを取り入れる事で向社会行動の芽生えに繋がると考えられる。（ダンス、合唱→二人組で良いところを真似する。）

・「比較ではなく、評価を」…集団内で協力する事で、優しい行動を身に付け、社会性を高める教育として効果があると思われる。（その子の行動に対しての評価をする）

・「リフレーミング」…否定的な解釈を肯定的に捉えることによって感じ方に生じる変化を大切にする。

・やさしさや思いやりは、目に見えない、情緒的な絆である。この情緒を育む事は、難しいことであるが、人と関わりながら生き抜いていくためにとても大切なことである。この情緒を育む事は幼児教育の使命の一つだと考える。

<多文化共生の視点で>

相手を理解しようと、努力できるか

・インクルージョン→包括

・ダイバーシティ→多様性

・インクルーシブ教育…健常児障児、つまり障碍の有無といった視点ではなく一人一人に合った教育を行う。

・ボディランゲージ…身振り、手振りを用いたコミュニケーションの一つ。

・不ボディランゲージ…腕組など

目から入る情報 55%（表情） 話すスピードトーン 38% 声 7%

<やさしいにほんご>

・他国籍の人と関わる上で日本語を分かりやすく簡単にした文。

例) 今週の金曜日は、遠足のため、お弁当を持参して下さい。

やさしい日本語に直すと↓

8 / 23 日水曜日にお出掛けをしますので、お昼食べられるものを持ってきて下さい。

これを案内することで保護者とのコミュニケーションがとりやすくなる。